
JUDE -in the L city-

CHOPIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J U D E - i n t h e L c i t y -

【Nコード】

N 1 3 0 3 B

【作者名】

C H O P I N

【あらすじ】

金さえあれば何でもやる『何でも屋』紛いの商いをするシオと相棒のアリカ。いつも通りお金欲しさに軽く受けた1つの依頼を発端に巨大な事件に巻き込まれ、流されていく。果たして俺様男と阿呆女は無事にお金を手に入れることが出来るのか。アクションファンタジー。

01 日常風景

ベットにて、俺は長ったらしい暇な時間を利用し惰眠を貪っていた。それというのもつい先日、『スラム全域の野良犬に狂犬病注射』などという無謀な仕事を終えたばかりなのだ。

第一、既にほとんどの犬が狂犬と化しているのだ。

約二週間も大量の犬との死闘をほぼ毎日繰り広げていれば否が応でも疲れてしまっだろう。

そんなこんなで疲れのたまった体を休ませていると…甘ったるい声とともにゆさゆさと体が揺さぶられる。

「シオ…起きてよ…。」

俺の睡眠を邪魔するこいつは俺のパートナー『アリカ・L・ヒュールズ』。

「…起きてって…ねえ…。」

だんだん揺さぶりが強くなっていくにつれて声が震え始める。

肩の下までの長ったらしい痛みのない明るい金髪に白い綺麗な肌、目はパッチリとしていて綺麗な青、そして柔らかい雰囲気。見た目は完全に典型的な箱入りお嬢様のような風体だ。

しかし中身に教養や清楚さなど皆無、コイツの中はほぼ阿呆さと機械イジリの知識で出来ている。

こいつと組むにいたるのも、かなり特殊な状況と複雑な事件が関係するのだが…それはまた別の話だ。

ちなみに俺はこいつ泣かすのが好きだ、だから起きてやらない。

俺がそんなことを考えているとも知らず、アリカは小さく嗚咽を漏らしている。

「…どうしよう…起きてくれないよ。仕事なのに…」

仕事、ということは依頼人が来たようだ。

アポなしで訪問してくるあたりどこかのいけすかない長い金髪の男かとも思ったが…。

まあ残念なことに依頼人が誰であろうと財政状、仕事を選び好みすることはできない。

俺は面倒臭いと思いつつ頭を掻きながら体を起こす。

「それを早く言え阿呆…」

「起きてるなら早く言ってくださいよお！」

「黙れ。頭に響く。」

「…なんでそう自己中心的んですか？何様ですか、まったく…」

「俺様だ。」

アリカは

「はあ」

とため息をついた。

「そうでしたね…あなたはそうなんですよね…」

「文句あんのかよ…」

「いえ…聞いたあたしが悪かったんです。気にしないで下さい…」

「わかればいい。」

俺は立ち上がり首を慣らす。

アリカはそれを見て「あたしのほうがお姉さんなのに…」などとぶつぶつ呟いていたがあえて無視する。

「そうだな…5分で支度する、先に行つてろ。」

俺は言いながら着ていた仮眠用のシャツとズボンを脱ぎ捨てた。

アリカは俺の動きをボーッと眺めていたが、俺の裸体を見て表情を曇らせる。

「…なんだデメエ…。」

「い…いえ…。そ…その…。」

「だったらじろじろ見てんじゃねえ、気分が悪い。」

「あつ、いや…傷が増えているので…。」

俺は自分の体を眺める。

引き締まっているが少し痩せぎみな体には複数の噛み傷が残っていた。

「当たり前だろうが、100匹以上の犬と追いかけてこしたんだ。少しは傷ぐらい出来る。」

「そりゃそうですよねえ。そういえば狂犬に噛まれたら病気とか移らないんですか？」

不思議そうに首を傾げる阿呆。

俺も不思議だ…何故こんなにもこいつは頭が悪いのだろう。

俺は気持ち良いほどのおバカさんを前にちよつとした悪戯を思いついた。

そして即刻実行、俺は低い唸り声を出し始めた。
顔を伏せ、そのままベットの从上からアリカをにらみつける。

「…ぐるるる…。」

「えっ？…ちょっとシオ、どうしたんですか？もしかして本当に犬男に！？」

そんなことあるはずがない、というか犬男ってなんだ。

アリカも打ったはずだ、仕事前に『予防注射』をしつかりと。俺は突っ込みたい気持ちを懸命に押さえた。

流石真性の阿呆だ。

この期待を裏切らないほどの阿呆さに惜しみ無く称賛の拍手を贈りたいと思っただ。

もはや可哀想な脳ミソだと騙すのも気が引けるが…安眠を妨害された恨みだ…。

いかせていただく。

「ぐるああああ…！！！！！！！！」

「キャッ！！！！」

俺は凄い勢いでベットにアリカを押し倒す、そして上に乗るとアリカの首筋に噛み付く直前で止める。

アリカが震えた声をだす、おそらく涙を浮かべている事だろう。

『ざまあみろ』と思いながら俺が横目アリカを見ると、予想と反してこの阿呆は涙とともに恍惚の表情を浮かべていた。

「…シオ…。初めてなので優しくしてくださいね…?」

そうだなあ…大人しくしていれば考えないこともない…ぐへへえ…
って!

「なんでそうなるんだ貴様は!!!!!!!!!!!!!!」

俺はそう叫びながらアリカをベットから放り投げた。

アリカは地面に尻餅をついたまま

「痛いです…」

と声をもらす。

「あれ!? 犬男に変身しちゃったんじゃないんですか?」

「んなわけあるかボケ! くだらないことを言ってるじゃねえ!!!!!!」

「でもシオが勝手に襲ってきたんじ」

俺は最後まで言わずにアリカにフライングクロスチョップをかます。

「なんか言ったか…?」

「いつ、いえ! 先に行って待っています!」

そう言つとアリカは部屋を出て行った、…少し乱れた衣服を見て微かに頬を染めながら…。

それを見て思った、ムカツクから後でもう一回チョップをかまそうと。

そんなことを考えながら俺は立ち上がると大きくため息を鏡の前に立つ。

錆びた鉄のようなボロボロの赤い髪は耳を隠す程の長さ。

少したれ気味の目は深い青色。

鏡の中のコイツは確か『シオ』という名前だ。

そしてそのまま鏡を見ながら黒いYシャツのネクタイを緩めに締める。

そして上にスーツを羽織ると、革靴に足を差し込む。

これが『裏の商い』たる俺の正装だ。

01 日常風景（後書き）

一所懸命に書いてます。

不束者ですがよろしくお願いします。

感想とか妄想とか頂けるととても嬉しいです。

02 裏の商い（前書き）

繋ぎのお話です。

これからもこれぐらいの短さのショートストーリーがちょくちょく入ってきますがご了承ください。

02 裏の商い

『エル・シティ』は世界でも有数の巨大都市だ。

少なくとも俺はここから出ることは何年かに一度ほど、

それほどまでにエル・シティは広大で、物に溢れ、人に溢れている。それだけに犯罪や事故などは後を絶たない。

エル・シティには『表』と『裏』が存在する。

この街の大部分は『表』として存在している。

街は学生や労働者、女、子供が楽しそうに歩き、そこは純粋な笑顔が溢れている。

そこに小さな『裏』は確かに存在するが、『表』の人間は誰も気が付かない。

『裏』が一番濃い場所。

それが街の3分の1の大きさを占める、俗称『スラム』である。

そこは貧困に苦しむ者が下を向き歩き、『表』から溢れた犯罪者がひしめき合う。

多数の独立したコミュニティーが争い合い、時には協力し、少しずつ『表』を侵食せんと牙を研ぐ場所。

それが、スラム。

スラムに法律はなく、人は簡単に死ぬ。

犯罪が犯罪を喰い、人が人を喰い、力が力を喰い新たな力を手に入る。

だからこそ俺達のような『裏の商い』は強大な力を以ってして初めて成り立つ商売。

『金さえあれば何でもやろう。金さえあれば力を貸そう。非力な貴様達にこの裏で生き抜く術を与えてやろう。』

「俺はそんなこの仕事を通じて何を得ようとしているのか、金が、それとも更なる力か、許しか、あるいはもっと別のものか…。なあどう思う？」

前にこんな質問をアリカにしたことがあった。するとアリカはにこやかに笑って言った。

「お金じゃないですか？だってスラム中の犬の尻追っかけたって地位も名声も何も手に入らないじゃないですか。お金が入んなかったらやってられませんよ。それとも何ですか？シオはあれで『犬ハンター』の称号でももらえると」

ちなみに最後まで言い終わる前にジャイアントスイングをかましておいた。

実際は的を得てる。

金のためって考えるのが一番楽だしな。

今は、それでいいのかもしれない、そう思うことにしたんだ。

たとえば血をかぶったって、完全なる自己正当化の前では、もう何も感じやしないんだ。

02 裏の商い（後書き）

愛をください。

そう感想と言つ名の貴方の愛を…。

03 キルファと依頼（前書き）

03は01の続きです。

判りにくくてご迷惑をおかけします。

03 キルファと依頼

事務所のリビングの扉を思いっきり開くと中の人間の目が一斉に俺のほうを向く。

といつても2人しかいないのだが。

「…シオ、遅刻してきたんだからもう少し静かに入ってこれないのかい？」

俺の姿を見て長い金髪をした男がうなだれながら言った。

こいつは『キルファ』、『とある組織』の諜報員だ。

つまりこいつが来ると言うことは『とある組織』が今回の仕事の依頼人…ということになる。

ちなみにキルファの苗字は忘れた、何故なら俺の細胞が覚えることを拒否するぐらい俺はコイツが大嫌いだからだ。

「…遅刻だあ？」

「君が来るのを待ってたんだ、少しぐらい気を使ったっていいだろう？」

「てめえ…人に仕事頼む分際の癖してでかいクチ叩くな。」

俺とキルファはお互いににらみ合う。

「ま、まあまあ！シオも急いで来たんですし、キルファさんもそんなに怒らないでください。ね？」

すかさずアリカがお互いをなだめようとする。

それを聞いて俺は小さく舌打ちをすると椅子に座った。

すると隣のアリカが机の下から俺の足を蹴って来たのでにらみつけ

るが、ぷいと顔をそむけられた。

…やられっぱなしもムカツクのでさりげなく物凄いスピードでアリの首筋にでこぴんを打ち込んでおく。

「いったあ！！」とアリカが声を上げるが当然無視。

しばらくするとうなだれていたキルファがため息をつきながら顔を上げた。

「…僕個人としてはかなり気乗りしませんが貴方達に仕事を頼みたくてきました。」

「で…どんな仕事だ？事前に連絡無しって事は相当急いでるんだろ？」

「ご名答。かなり差し迫った依頼なので無駄なところは省いて説明させていただきます。」

キルファは一度咳払いをすると話し始めた。

話を聞き終わった後…俺はもう一度舌打ちをして机へ突っ伏した。正直げんなりした…何故こうもくだらない仕事で疲れた後にこういう面倒くさい大仕事が来るのだろう…。

「それで？依頼、受けていただけなんですか？」

キルファの問いに、俺はうなだれながら答える。

「…ああ…受ける。」

即答した俺を見てキルファが目を見開いた。

「…シオ…僕が言うのもなんなんですが、最近仕事に見境ないですね。」

確かにキルファの言うとおりだ。
最近の俺はどうかしてる…。

この間の犬の依頼にしたって、実際はかなり割に合わない仕事だった。

しかしそこまで無理をして仕事してもこの事務所には『金がない』のだ。

理由は恥ずかしくてとても言えたものではないが…。

「まあまあ、お金と平和の為です！頑張りましょう！！」

アリカは立ち上がり無駄に阿呆さを振りまく。

ちなみに『平和』の単語が後付けなのはアリカの優先順位が関係しているのだろう。

そこは俺も同じなのだが、俺の場合『平和のため』という台詞など嘘でも吐けない。

キルファは既に帰り支度を済ませ「それでは仕事の件はお願いします。」と言うと出口に向かっていた。

しかしドアの前に立つと何かを思い出したかのように立ち止まると振り向く。

「キルファさん、どうしたんですか？忘れ物ですか？」

「…いや。シオもやるなあと思ひまして、ね。」

そう言うとキルファはさも『面白いことを見つけた』というような微笑を浮かべた。

俺が怪訝そうに顔を向けると、ますます面白そうに笑いを浮かべる。

「アリカさんの首筋…ですよ。いやぁー若いつていいですねえー。」
「…いつたい何のことだ？」

何を言っているのか理解できず、俺は首を傾げる。

「いやいやーとぼけなくてもいいですよ！先程のベットでのことは内密にしておきますから。」

そこまで言つとキルファは「失礼しますよ、犬男さん」と満面の笑みを浮かべて部屋を出て行く。

「ボタン」とドアの閉まる音が響いて少し間が空く。

数秒後俺は嫌な予感とともにアリカの首筋を見た。

そこには先程俺が放つたでこぴんの後が赤く残っている、そしてそれは…キスマークに見えないこともない。

緊急事態だ。

するとアリカもそれに気付いたのか顔を赤らめながら言つ。

「…誤解されちゃいましたねえ♪私は別にかまわないんですけど…
というかさっきのベットでのシオはもはや犬男じゃなくて狼男」

最後まで言う前に俺はアリカに華麗にドロップキックを放つた。

アリカは綺麗に吹っ飛んでいく。

きりもみしながら宙を舞うアリカを目で追いながら俺は思った。

次会つたら『キルファという誤解』を消滅させなければ…と。

03 キルファと依頼（後書き）

夢を見ました。

暖かい感想をもらえる夢。

04 害（前書き）

本文中の 表します。 ご了承ください。	は場面や一人称、三人称の切り替えを
---------------------------	-------------------

04 害

スラムと街の境、『表』と『裏』の境目に位置する巨大なビル。その一室で数名の男女が巨大な机を囲んでいる。

そんな中一人席を立つたこの会合の進行役と思しき長い金髪の男が声を張っていた。

「というわけで皆様のお手元にある資料がその『害』となりうる男の情報になります。」

その場の全員が一斉に手元の紙の束に注目する。

進行役は続ける。

「恐らくストリート出身でしょう。10年前、スラムでしかない薬の売人をやっていました。名前は『ドクター』と呼ばれていたそうです。」

そこで黒髪の若い女性が声を漏らす。

「…売人風情がドクターとは良く言ったものねえ…、病原菌を撒き散らしている癖して。」

進行役は彼女を一瞥すると更に続けた。

「そしていつ手に入れたかは定かではありませんが彼は取引の最中に『ある薬』を手に入れました。そのことは昔彼と仕事をしていた今は証人として保護している男からの情報です。そしてその薬というのが…。」

全員の顔が進行役の顔に集まる。
彼は一息ついた後言う。

「我々が5年前完全に駆逐した筈の薬、『神への裏切り』に症状が酷似した麻薬。『J^{ユダ}UDE』です。」

一瞬の静寂ののち、一人じっと座っていた銀髪の初老の男が声を発した。

「…なるほど…ドクターがそのJUDEを使って何かを企てている…そういうことなんだろう？キルファ。」

「はい。正確にはもう既に動き始めているといったほうが正しいでしょう。」

進行役…キルファはため息をつく。

「先日スラムにJUDEを試験的に投与されたと思われる犬が数匹発見されました。」

黄髪の若い男が「げっ、まじかよ…」と小さく呟いた。

その言葉を聞いたキルファの頭の中に

「おい金髪ロング！！なんだああの犬、反則だろおが！割にあわなすぎだ！！」

と電話口で怒鳴ってきた赤髪の若者のことを思い出したが、すぐに意識をこちらに戻す。

「その犬は速やかに駆除することができましたが、近いうちにまた動きがあるはずです。」

初老の男は少し考えるそぶりをした後言った。

「わかった、早急に何か手を打とう。」

荒廃したスラムのビルとビルの隙間を縫うように一台のバイクが疾走している。

俺はそのバイクの上で赤い髪をぼさぼさとなびかせながらハンドルを握っていた。

寝起きでただでさえ機嫌が悪いのに、後ろのお荷物がさらに俺を苛立たせる。

「キャッ!!」

「てめえはいちいちキャーキャーうるせえんだよ!」

「シオの運転が荒いからじゃないですか!!」

「ああ!?!とにかく黙ってろ!!」

俺はアリカに釘をさすとさらにバイクのスピードを上げた。

今回の仕事は最初は単なる街の暴走族チーム同士の戦争の鎮圧だった。

しかしどうも片方のチームのメンバーの一人が銃を発砲してしまったことにより大規模な戦闘へと発展してしまったらしい。

事を荒立たせる前に鎮圧しろとの依頼なのだが…どうも先程から耳に入ってくる銃撃音を聞く限りそれは難しそうだと感じる。

「シオ！！あそこを左に曲がったら戦場のど真ん中、スラムの中央広場です！！」

「わかってるつての！」

俺はバイクのスピードを落とすと路地の途中に止めた。

アリカは素早く飛び降りると、持っていたケースから大量に機械の端末を広げ始める。

「サポートは任せてください。」

「…今日はまともに役にたつてくれよな…。」

まあ、実際こいつにまともな仕事は期待してないが。

「ま、いいや。暴れてくる。」

「あ、暴れてくるつて！？すごい危険な任務なんですよ！？そんな気持ちで行ったら…、」

「いちいちうるせえ…。黙れ阿呆。」

「あ、あほ…？もういいです！！シオなんてこの世で最もグロテスクな死に方で死んじゃえ！！」

アリカはぷいと顔をそむける。

俺はアリカのそんな姿に笑いをこらえながら、バイクの脇に装着してあった『長い物』を手にとる。

「かならず生きて帰ってきてください。」
アリカが小さく呟く。

「言ってることが矛盾してる。やっぱり阿呆だな。」
俺は小さく笑う。

「行ってくる。」

そうして俺は歩みを進めた。

04 害（後書き）

立ちブリッジを練習していたら首を捻りました。

05 禁断の果実（前書き）

ここから少しづつ話が血生臭くなっていますのでご注意ください。

05 禁断の果実

周りの景色が物凄い速度で流れていく。

やがて路地の終点、そして戦場が目に入り俺はため息をついた。

「…まったく、頭わりいことしてんじゃねえか…。」

凄惨だった。

いつもならばスラムに住む人々の数少ない憩いの場で有るべきその広場。

そこは既に無数の死体と血によって彩られていた。

「おい、阿呆。聞こえるか？」

俺は無線のスイッチを入れると問い掛けた。
すると不機嫌そうなアリカの声が聞こえる。

『…聞こえてますけど…その呼び方じゃ応答したくありません。』

「今一番生体反応が多いところは何処だ？」

『無視ですか…まあそうだろうと思いましたが…。E-2の西側、広場から東に2ブロックですね。』

「わかった。」

無線の向こう側で『…一度ぐらい名前で呼んでくれても…』などとブツブツ呟いているがいつも通り無視する。

「う、動くな!!」

歩き出そうとした直後、突然後ろから声がかかる。

「お、お前はどっちの味方だ!!」

後ろを振り返ると一人の青年がこちらに銃を向けていた。
俺は頭を掻きながら言う。

「どっちって...」

俺は答える。

「俺だよ。」

青年は「ひっ、ひい!」と情けない声を上げながら銃を発砲した。
顔が引きつっているところを見ると緊張で無意識に引き金を引いてしまったのだろう。

銃弾を受けた俺は衝撃で地面へ倒れる。

『シッ、シオ!大丈夫ですか!?!』

無線の向こう側からアリカの声が聞こえる。
まったく...相変わらずの心配性だ。

アリカの言葉を見無視すると、俺は不機嫌そうに立ち上がる。

「...いてえなあ...てめえ。鞘が壊れちまっただろうが。」

青年の放った銃弾は俺の持っていた黒い『長い物』にめり込んでいた。

俺は一見ただの黒い棒にも見えるそれを一振りする。

すると『ガチャン』という音とともに銃弾が撃ち込まれた方の部分が抜け落ち、そこに黒く長い刀身が現れる。

実はこの黒いの、俺の武器である。

それを見て青年は尻餅をつく。

「ひっ！！お前何者だよ！！！！」

「貴様なんぞに言う必要ねえつての。」

俺は一瞬にして青年との距離を詰めると武器を持ってないほうの手で青年の頭を掴む。

「いったい何を…バチン！！」

次の瞬間奇怪な音とともに青年は地面へ倒れこんだ。

「…さあて…東に2ブロックだったか。」

俺はまた走り始めた。

「はあはあ…。」

男は息を荒げながら手に持った銃を地面へと落とした。

『こんなはずじゃなかった』と彼は思う。

チームを守るためにと手にした銃が自らの大切な仲間を沢山失うことへと繋がってしまった。

戦場から大分離れてきた今でも頭の中にしっかりと頭の中にあのおぞましい光景が浮かんでいた。

飛び交う銃弾、悲鳴、怒号、血、死。

彼は頭を抱えるとゆっくり路地に体を横たえた。

「うつ…うつうつ。」

自然と涙が溢れてくる。

頭の中には仲間達との楽しかった日々が思い出される。

美しい思い出とまぶたの裏に残った死の残像が彼の涙腺を刺激する。

「うああああ！！！！」

絶望を背負いながら彼は泣いた。

しばらく路地裏には彼の嗚咽だけが響きつづけた。

そして彼が目を擦り立ち上がるとそこには一人の長身の女が立っていた。

通りから入り込む逆光で顔はしっかりと見ええない、がまだ若いようだ。

女は鮮やかな白い長髪、スーツに身を包んでいた。

男はすぐさま近くにあった銃を拾うと女に向ける。

「何だお前は！」

「怪しいものではないですよ。」

女が喋る。

「ただ薬屋です。」

「…薬屋…だと？」

「そう、薬屋です。『メロウ』と言います。」

メロウはにこやかに笑った。

「それで…その薬屋がなんのようだ？」

男はまだ銃口を下ろさない。

「…力が欲しくはないですか？」

男は怪訝そうに眉を顰めた。

「力だと？」

「そうです。貴方に大切なものを守る力を化して差し上げます。」

仲間のことを思った。

まだ戦場で戦っている仲間を、救う力が自分にはなかった。

だから卑劣にもこうして一人だけ逃げてきてしまったのだ。

力さえあれば…。

彼のそんな気持ちをメロウは見抜いているかのように手を差し伸べた。

「さあ、如何なさいますか？」

「…くれ…、力をくれ!!」

そうして男は禁断の果实に手を伸ばす。

05 禁断の果実（後書き）

授業中にみんなで組み体操をしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1303b/>

JUDE -in the L city-

2010年10月28日07時24分発行